

アジアの家族・ジェンダーの「伝統」と「近代」再考のためのノート —韓国高齢者のライフコース・インタビューを中心に—

山根 真理

家政教育講座（家族社会学）

A Note for Rethinking Tradition and Modernity of Family and Gender in Asian Societies: Focusing on Life Course Interview of the Elderly in Korea

Mari YAMANE

Department of Home Economics Education (Family Sociology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1. はじめに

本稿の目的は、筆者が共同研究者とともに2000年代に実施してきた二つの調査プロジェクトの成果から、アジアの家族・ジェンダーの「伝統」と「近代」を考える視角を提案することにある。

本稿は、アジアのライフコースに関する二つの研究プロジェクトの成果にもとづいている。ひとつは2004年度に大韓民国慶尚北道に位置するキョンサン市で高齢者の方々を対象に実施したライフコース調査（キョンサン・ライフコース調査）である。いまひとつは、2007年度から2009年度にかけて、東アジア、東南アジアの諸地域で実施してきた、「時代とライフコースの重なり」に関する調査プロジェクト（アジア・ライフコース・プロジェクト）である。

二つの研究プロジェクトの問題意識¹⁾は、大きく整理すると三点に集約される。ひとつは、ライフコースを通して、アジアの歴史を全体的・統合的に理解することである。周知のように、個人の人生の出来事と歴史過程のかかわりをみる研究は、1970年代のアメリカで登場し、G.エルダー、T.ハレブンなどの代表的な著作を生み出してきた。日本でもこの視角は1980年代に定着し、森岡清美、青井和夫、安藤由美など、多くの研究蓄積があり、家族研究の一分野として定着している（安藤, 1998, 2000、森岡・青井, 1991）。しかし、アジア諸地域に視野を広げ、人生と歴史的時代のかかわりを包括的にとらえる研究はなされてこなかった。植民地の経験や「国境」を超えた移動体験を含む20世紀アジアの歴史を、生きられた人生の記憶にもとづいて記録することは、まさに最後の機会であり、「記録することで、歴史的に記憶する」という意味で、意義

があると考えられる。

二つ目の問題意識は、女性とケアへの着目である。人生の出来事のなかでも特に、出産、子育て、介護などケアにかかわり、女性が中心になることが多い家族イベントに特に着目した。そのことで、アジア諸地域の家族・ジェンダーの「伝統」と「近代」を再考する認識がひらかれるのではないかと考える。

第三に、「国境を超える移動」をも含め、20世紀から21世紀の「ライフコースと時代」にたいする地域横断的な認識をひらく、ということである。周知のように、1990年代以降、国境を超える人とモノの移動は激しい。そのグローバリゼーション過程のなかで、国際結婚や家事労働者の国際移動など、国境を超えるライフコースもまた、地域間の経済格差を背景にして、拡大してきている。そのようなグローバリゼーションのすすむ21世紀の時代とライフコースを考えるとともに、グローバル化がすすむ現時点から、20世紀の国境を超える移動と家族・ジェンダーのかかわりを再考することが、三つめの問題意識である。

本稿では、以上の問題意識をふまえ、以下の三つの課題を設定する。

- ①家族・ジェンダーの伝統的パターンは20世紀初期から中盤に、どのように変わったのか。
- ②家族・ジェンダーの「近代的パターン」の特徴は、どのようなものか。
- ③植民地経験は、個人のライフコースにどのような影響をあたえたか。

これらの課題について、まず、韓国の場合について、キョンサン調査データにもとづいて考察する。さらに、

アジア・ライフコース・プロジェクトで実施した調査知見から、アジアのライフコースと歴史を考えるうえで得られた示唆について述べ、アジアの家族・ジェンダーの「伝統」と「近代」を考えるための視点を提示したい。

2. プロジェクトの概要

本稿のもととなる二つの研究プロジェクトについて、その概要を述べる。

(1) 韓国キョンサン調査

2004年度に、大韓民国慶尚北道キョンサン（慶山）市で1925年—1939年生まれの人を対象にライフコースを訊ねたインタビュー調査を実施した。調査の概要は、以下の通りである³⁾。

調査地は、慶尚北道に位置し、テグ広域市に隣接する近郊地域である。もともとは農村地域であるが、繊維、機械金属、石油化学などの中小企業を誘致している産業都市でもある。棗、桃、葡萄など、商品作物を中心に農業も盛んである。また13の大学、175の附属研究所（調査時点のデータ）をもつ学園研究都市でもある。

社会関係については、慶尚北道は両班（ヤンバン）的伝統が強く、家族・親族関係や社会関係全般にかんして「保守的」な傾向が強いとされる。

- ・調査地：大韓民国 慶尚北道 キョンサン市
- ・調査時期：2004年8—9月
- ・調査対象：1925-1939年生まれの女性16名、男性14名
- ・調査方法：人生の出来事にかんする半構造化インタビュー調査

(2) アジア・ライフコース・プロジェクト

アジア・ライフコース・プロジェクトは、2007年度から2009年度にかけて、科学研究費の助成を受けて行った共同調査研究プロジェクトである⁴⁾。調査は、①高齢者を対象にしたライフコースの質問紙調査、②プロジェクトメンバーである各研究者の関心に応じたインテンシブ・インタビュー調査、の二つからなる。それぞれの概要は、以下の通りである。

① ライフコース質問紙調査

- ・調査地：大韓民国（ソウル、テグ）、中国（大連）、フィリピン（州都 ラワッグ）、日本（名古屋）
- ・調査時期：
 - ソウル：2009年4—5月
 - テグ：2009年3—4月
 - 大連：2009年4—5月

フィリピン：2009年9—11月

名古屋：2009年8—9月

・調査対象者：

1920—40年代生まれの高齢者（65歳以上の人）

ソウル：100ケース

テグ：97ケース

大連：223ケース

フィリピン：75ケース

名古屋：82ケース

・調査方法：人生の出来事についての、質問紙調査。

5地域においてほぼ共通した質問紙を用い、調査員が面接して質問紙に記入する方法をとった。

② インテンシブ・インタビュー調査

中国新疆ウイグル、ベトナム、ミャンマー、日本などで、各研究者の関心にもとづいたインタビュー調査を実施した。研究テーマは、高齢者のライフコース、国際移動する家事労働者のライフコース、女性の主体性の変化など、多様である。

3. 「朝鮮」の家族・ジェンダーの伝統的パターン

キョンサンデータにもとづいて考える前に、「朝鮮」の家族・ジェンダーの伝統的パターンについて、理念型的に整理しておきたい。「伝統」をいつの時代に設定するかということは非常に大きな問題だが、ここでは、ある社会が近代的インフラストラクチャー（学校、軍隊、医療機関、金融機関、近代法や税制など）を整備する前の時代として、とらえる。

韓国の場合、その意味での「伝統的」な時代は、日本による植民地統治がはじまる前の時代、朝鮮時代である。朝鮮時代は14世紀末から1910年までの長期にわたる。家族・ジェンダーのありようも、この間に大きく変化した。父系原理にもとづく家族・ジェンダーのパターンが形成されたのは、朝鮮時代後期のこととされる（李 2002、趙 2002）。

そうした意味での「朝鮮」の「伝統的」な家族・ジェンダーのパターンを理念型的に整理すると、以下のようになるとまとめられる。

まず家族・親族システムとしては、子どもが父親の血縁成員権をとる「父系制」（patri-lineal descent system）、結婚後は女性が夫方の家に入る「夫型居住」（ただし「婿留婦家」の慣習もあり）、長男夫婦が親と同居して直系家族を形成する規範の存在（「直系家族制」、などの特徴がある。結婚は仲媒婚が主流である。夫婦の年齢差について特徴的なのは、夫年下婚が珍しくなく、特に両班（ヤンバン）層においては一般的であったことである。

ジェンダーにかんしては、内外（ネーウエ）原理—男性は戸外の領域、女性は家内領域に、という空間分

離の原則—が特徴的である。家屋の構造にも内外原理はみられ、家の主人（男性）の領域である舎郎房（サランバン）、女性の領域である内房（アンバン）というように、家屋の造りからして、男女の空間分離があった。また、その空間分離にもとづいた性分業（戸外労

働は男性、家内領域の仕事は女性）がある。セクシュアリティにかんしては二重基準が存在し、女性の貞節の価値が重んじられた。

以上のような特徴を、「朝鮮」の家族・ジェンダーの「伝統的」パターンとして、表1にまとめた。

表1 「朝鮮」の家族・ジェンダーの伝統的パターン

家族・親族	系譜	父系制 (patri-lineal descrt system)
	居住制	夫方居住
	形態	直系家族制（長男同居）
	結婚	仲媒婚（夫年下婚あり）
ジェンダー	領域	男女の領域分離 内外（ネーウエー）原理
	分業	領域分離にもとづいた性分業
	セクシュアリティ	二重基準 女性の貞節重視

4. ライフ・イベントと家族・ジェンダーの伝統／近代

(1) キョンサン調査対象者の属性

本稿の主な分析対象となる2004年キョンサン調査の、対象者のプロフィールを表2に示す。まず世帯形態では、三世帯同居世帯は少数であり、高齢者のみの世帯が三分の二を占めている。「生まれ育った土地」は「キョンサン」が18ケースと圧倒的に多く、日本で生まれ育った人を除けば、テグ、チョンド、アンドン、ポハン、ウィソンと、いずれも慶尚北道に位置する地

表2 キョンサン調査対象者のプロフィール

ケース番号	生まれ年	性別	世帯形態	生まれ育った土地	居住地	教育歴	仕事（最長職）	備考
1	1929	女	単身	キョンサン	キョンサン	初等学校	農業	
2	1932	女	単身	キョンサン	キョンサン	—	食堂経営	
3	1933	女	単身	キョンサン	キョンサン	初等学校	清掃員	
4	1932	女	単身	キョンサン	キョンサン	—	—	
5	1932	女	本人、長男夫婦	テグ、福岡	キョンサン	高校	農業	
6	1936	女	夫婦	チョンド	キョンサン	なし	農業	
7	1935	女	夫婦	チョンド	キョンサン	初等学校	農業	
8	1937	女	夫婦、夫の母、未婚の子ども	チョンド	キョンサン	初等学校	農業	
9	1938	女	夫婦、息子夫婦、孫	テグ	キョンサン	初等学校	農業	
10	1936	女	夫婦、夫の母	アンドン	キョンサン	初等学校	無職	ケース 21 と夫婦
11	1927	女	本人、長男夫婦、孫	キョンサン	キョンサン	書堂に2年行った	農業	
12	1937	女	夫婦	キョンサン	キョンサン	高校	主婦、農業	
13	1926	女	本人、息子夫婦、孫	キョンサン	キョンサン	なし	農業	
14	1936	女	単身	大阪、豊橋	キョンサン	初等学校 2-3 年まで	食堂経営	夫とは別居
15	1935	女	単身	キョンサン	キョンサン	初等学校	農業	
16	1929	女	本人、息子夫婦、孫	キョンサン	キョンサン	初等学校 2 年	農業	
17	1928	男	夫婦	キョンサン	キョンサン	初等学校	農業	
18	1928	男	単身	大阪、東京	キョンサン	高校	農業	
19	1928	男	夫婦	キョンサン	キョンサン	大学	中学校教師	
20	1929	男	夫婦	キョンサン	キョンサン	中学	公務員	今の妻とは再婚
21	1935	男	夫婦、夫の母	キョンサン	キョンサン	高校	農業、会社勤務	ケース 10 と夫婦
22	1929	男	夫婦、息子夫婦、孫	キョンサン	キョンサン	高校	公務員、農業	
23	1936	男	母と二人	ポハン	キョンサン	高校	公務員	母の介護をしている
24	1930	男	夫婦	キョンサン	キョンサン	書堂	農業	離れに長男家族が住居
25	1935	男	本人、息子夫婦、孫	キョンサン	キョンサン	高校	農業	
26	1935	男	夫婦	名古屋	キョンサン	中学中退	タクシー運転手など	
27	1935	男	夫婦、息子夫婦、孫	ウィソン、日本	テグ	高校	公務員、自営	
28	1931	男	夫婦と娘	ウィソン	テグ	大学	公務員	
29	1937	男	夫婦と息子	キョンサン	キョンサン	高校中退	公務員、農業	
30	1938	男	夫婦	キョンサン	キョンサン	—	公務員、農業	

域があげられている。キョンサンおよび慶尚北道内で人生の大半を過ごした人が対象者の多数を占める。

教育歴には性別による違いがみられる。女性は初等学校修了あるいは中退の人が9人で多数を占めている。対して男性は中等教育まで進学した人が多数を占めている。

職業経歴にも性別による違いがみられる。女性は農業11人、食堂経営をしてきた2人をあわせると、自営の仕事をしてきた人は13人と多数をしめる。男性は農業をやってきた人と公務員に大きく二分される。しかし被雇用者として働きながら農業もやってきた、と回答した男性も4人おり、男性も何らかの形で農業を続けてきた人が多数をしめる。

(2) 伝統的パターンの多面的変化

では、当初に設定した三つの課題にそくして、キョンサンデータの知見から、考えていこう。まず、①家族・ジェンダーの伝統的パターンは20世紀初期から中盤に、どのように変わったのか、という問いについて、考える。

結論を先取りして言うならば、キョンサンデータから得られた一つの洞察は、家族・ジェンダーの「伝統的」パターンが変容する方向性は、多面的だ」ということである。

a) 伝統的パターンの緩慢な変化：結婚

伝統的パターンの緩やかな変化は、結婚にみることができる。

第一に注目されるのは、結婚年齢の上昇傾向である。図1は、対象者のうち、女性の結婚年齢を縦軸に、生まれ年を横軸においたグラフである。1920年代生まれの3人の人たちはいずれも10代で結婚しているが、30年代後半以降の人たちでは、20代の結婚が主流になる。このような婚姻年齢の緩やかな上昇傾向は、男性データにもみられる。

第二に、夫婦の結婚年齢の年齢差に注目すると、夫年上婚17ケース、夫婦同年齢婚2ケース、妻年上婚が3ケースである（不明8ケース）。対象者の結婚の大

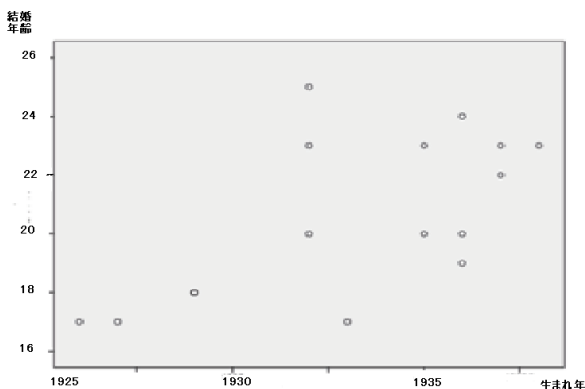


図1 結婚年齢の推移（女性データ）

半は夫年上婚であり、朝鮮時代の両班の典型的婚姻パターンとされる「妻年上婚」は多くはない。しかし次の事例にみるように、夫年上婚を奨励する意識が親世代にあって、当人の意識とのギャップがあったことを示す事例があって、夫婦の年齢差について、世代間に価値観の相違があり若い世代の方が夫年上婚を支持する意識をもっていたことが伺える。

【ケース1 妻年上婚に対する世代間の意識ギャップ】

1929年生まれ的女性。18歳で年上の男性と結婚した。同年に16歳の男性との縁談があったが嫌だった。「夫は年上がいい」と思っていた。

第三に、結婚までの過程に、本人の意思が入り込む兆しがみられる点に注目される。偶然の出会いで結婚した人はおらず、回答を得た28ケースのすべてが何らかの方法で他者が介在する「仲媒婚」（「紹介」と答えた人を含む）で結婚している。結婚に至る過程を分ける分水嶺になるのは、結婚前に「顔をみた」か「顔をみていない」かである。「結婚前に顔をみたことがない」ケースが女性9人、男性5人と、全体の約半数をしめる。特に女性では「顔をみたことがない」ケースが多い。対象者が結婚した時代には、結婚への過程に本人の意思が介在する余地が非常に少なかったことがわかる。ただし「結婚前に顔をみた」ケースのなかには、「仲媒婚だが形式的であり、結婚は自分で決めた」（男性）、「紹介されてから恋愛した」と答えた2ケース（いずれも男性）もあり、特に男性において本人の意思が入りこむ兆しが現れてきたことが伺える。

第四に、少なからぬ人々が「伝統的婚姻慣行」の名残だと考えられるヘムギ（헤ム기）慣行を経験していることである。ヘムギとは、結婚後も女性が実家に一定期間とどまり、その間は夫が通ってくる慣行である。朝鮮時代の両班層のあいだに、夫が結婚後、妻方の家に長期間とどまる「婿留妻家婚」という慣行があったとされるが、ヘムギはその名残であると思われる。

ヘムギについては当初からインタビュー項目に入っていたわけではないので、全ケースを網羅していないが、「ヘムギを行った」と述べた人は女性で9ケース、男性で2ケースである。期間は1年とする人が多い。

しかし同時に、対象者の人たちが結婚した時代は、このヘムギ慣行の衰退期でもあったことが、インタビューから伺える。次の事例は、4人の女性たちのグループインタビューで聞いたヘムギの話である。

【ケース2 1930年代後半生まれの女性4人グループインタビューで聞いたヘムギの話】

私たちはヘムギ最後の世代だ。通ってくる夫と会うのが恥ずかしく、夫となるべく会わないよう、逃げていた。夜は灯りを消し、昼はきょうだいと一緒にいた。

以上にみるように、結婚というライフイベントについては、「伝統的パターン」の緩やかな衰退過程をみることができる、と考えられる。

b) 伝統的パターンの衰退と再生：父系／父方居住原則

伝統的な家族・ジェンダーの特徴は、必ずしも一方的に衰退するわけではない。いったん「衰退」したかにみえる特徴が、のちに再生されることもある。キョンサンデータでは興味深いことに、その「衰退と再生」は、「朝鮮の家族・親族」の最たる特性とされる、父系／父方居住原則にみられた。

表3は、出生順位（女性の場合は夫の出生順位）、親との同別居、祭祀主催の組み合わせパターンを示したものである。周知のように、韓国の「伝統的」家族は、理念的には、長男が親と同居し祖先祭祀を主催することを理想とするが、対象者の人々の親との関係を見ると、この理念から外れたケースは例外ではないことがわかる。

表3のイタリック体の数字で示した部分が、長男同居・祭祀主催の原則から外れたケースである。理念から外れたケースは合計12ケースと、ケース全体の半数近くにのぼるのである。

特に長男であるのに祭祀を主催しない、あるいは長男以外で祭祀を主催しているケースは、父系原理から外れた変則的なケースとして注目される。本人あるいは夫の出生順位と祭祀主催が矛盾することになった

表3 親との関係

(出生順位・親との同別居・祭祀主催の組み合わせ)

	女性	男性	計
長男・同居・祭祀主催	7	5	12
長男・別居・祭祀主催	—	3	3
長男・同居・祭祀主催せず	1	—	1
長男・別居・祭祀主催せず	—	—	—
長男以外・同居・祭祀主催	—	4	4
長男以外・別居・祭祀主催	2	—	2
長男以外・同居・祭祀主催せず	2	—	2
長男以外・別居・祭祀主催せず	—	2	2
不明	4	—	4
計	16	14	30

注) 女性については夫の出生順位を示した。

きさつには、大きくわけて三つのパターンがある。第一に長男が遠方に住んでいるために次男以下の息子が祭祀を引き受けるというパターンである。第二に、長男が家を出て夫・家の継承者としての役割を果たさなかった場合である。第三に、植民地時代と解放後の社会的混乱が影響を与えたケースである。

植民地時代の社会的混乱のため、長男以外の息子が祭祀を主催してきたケースを紹介しよう。

【ケース3 四男だか祭祀を主催してきたケース】

日本に生まれた。東京で高校まで進学し、解放後、朝鮮半島に帰った。その後、兄弟たちは日本に戻った。長兄は日本に新しい妻ができ、帰ってこない。兄嫁と子どもは朝鮮に残った。両親とは結婚後も同居。祭祀は自分がやってきたが、20年前に甥（長兄の息子）にゆずった。

このケースから推測されるのは、植民地時代と解放後の社会的混乱が家族離散をもたらし、祖先祭祀の長男原則を貫徹できなかった場合があること、新国家建設とそれに続く経済成長を経て、長男祭祀の原則が復活した場合がある、ということである。

(3) 近代的なインフラストラクチャーの導入

次に二つ目の、②家族・ジェンダーの「近代的パターン」の特徴は、どのようなものか、という問いについて、考えよう。この問いにたいして、学校、軍隊、出産の医療化という、人生に大きな影響を与える「近代的」インフラストラクチャーの導入に着目する。

a) 学校と軍隊

対象者の人びとの「成人期への移行」パターン、すなわち大人になる道筋に、学校制度と軍隊は、どのように関わっているだろうか。

まず親との別居経験をみると、親と別居した経験は、性別によって大きく異なっている。成長過程で親と別居したことがある男性は8名いるが、女性で「親と別居経験あり」とした人はいなかった。「親と別居経験あり」とした男性の別居の契機は、通学が5人、軍隊が2人（不明1人）である。学校と軍隊は男性の生活圏を拡大する機能をもっていたことがわかる。

次に成人期への移行パターンをみよう。表4は、対象者の人びとの成人期への移行パターンを示したものである⁶⁾。

表4 成人期への移行パターン

	女性	男性	計
学卒せず - 結婚	5	—	5
学卒 - 結婚	10	—	10
学卒せず - 初職 - 結婚	—	1	1
学卒 - 初職 - 結婚	—	4	4
学卒 - 結婚 - 初職	—	7	7
結婚 - 学卒 - 初職	—	1	1
不明	1	1	2
計	16	14	30

注) 農業も「初職」に含めた。ただし本人の自己申告によって分類したため、実際には農業に従事していても「初職」にカウントされないケースもあると思われる。女性の場合も、実際には結婚前に農業手伝いをしていた可能性がある。

この表からまず着目されるのは、成人期への移行パターンもまた、性別によって大きく異なることである。男性の場合、学卒・初職・結婚すべての出来事を経験した人がほとんどであるが、女性は「初職」経験ありとした人はおらず、「学卒」も経験していない人が5人いる。学校経験をもたないことは必ずしも社会階層と対応せず、有名な両班の家系に生まれた女性で「学校に行かず、結婚前は家で詩を学んだりして暮らしていた」という人もいた。近代的学校制度の浸透には男女で時差があり、女性を家内領域に押しどめめる力が働いていたことが推測される。

第二に、男性の移行パターンにおいて、軍隊が少なからぬ影響を与えていることである。男性の移行プロセスで一番多いのは「学卒—結婚—初職」の7ケースであり、「学卒—初職—結婚」が4ケースで、それに続く。男性で結婚が初職に先行するケースが多いのは、徴兵生活が長かったからである。この夫の徴兵生活の影響を受けて、新婚生活が不安定であったケースは多い。

b) 出産の医療化

次に、近代的インフラの一つである近代医療の浸透について、出産の医療化に注目して考えてみよう。

表5は、対象者の人々（男性の場合は妻）の「出産を介助した人」を示したものである。

キョンサン調査の対象者となった人びとの出産介助の担い手として病院、産婆などの専門家をあげた人は5人と少なく、この世代の人びとの出産は、主として親族によって支えられていたことがわかる。親族のなかでも夫方の親族、特に「夫の母」の介助を受けた人は多い。

病院での出産を経験した人はいずれも1930年代後半生まれであり、この出生コホートが病院出産への転換点になっている。

夫が出産介助したケースが2ケースあることは、「伝

表5 出産を介助した人

	女性	男性	全体
夫の母	6	6	12
妻の母	1	2	3
夫方親族	3	—	3
妻方親族	—	—	—
夫	—	2	2
夫の母と親族	—	1	1
夫の母と病院	1	—	1
産婆	1	1	2
病院	1	1	2
その他	—	1	1
不明	3	—	3
計	16	14	30

統的」な領域分離の観念からすると興味深い。このケースの中には、「本でへその緒を切る場所を学んで長男の出産に挑んだ」男性があり、男性の出産への参加が、近代的衛生・科学的観念の浸透とともになされた場合があることが示唆された。

朴正熙政権下でなされた、産児制限について語ったケースは9ケースであった。「中絶しようと思ったがやめた」「ループ（避妊リング）を使用していたが、位置がずれてしまって妊娠した」などと語ってくれたケースもあり、産児制限政策が近郊農村地域の女性たちの生活のなかに浸透していたことが伺えた。

(4) 「日本」経験とアイデンティティ

キョンサンデータ解釈の最後に、「日本」経験が人生に与えた影響について、考える。「③植民地経験は、個人のライフコースにどのような影響をあたえたか」という問いである。

対象者の人々のうち、日本で育てられた経験をもつ人は5人、そのうち3人が「植民地時代」を「最も大変だった時期」としてあげている。「日本」経験は、対象者の人々の人生に、少なからぬ影響を与えたことが示唆される。

韓国社会への適応困難について語ったケースを紹介しよう。成長期に「日本」での生活を経験したことは、解放後の「韓国」での生活に対して、アイデンティティの危機をもたらし、深刻な影響を与えた場合があったことがわかる。

【ケース4 韓国社会への適応困難について語ったケース】⁷⁾

1928年生まれ男性。大阪、東京で育った。（大阪方言を話された。）東京で高校まで進学し、解放後帰国した。一番大変だったのは解放後の適応であった。言葉も全くわからないし、自殺しようかと思った。韓国社会とは一線を画して「自分の方針」で生きてきた。

5. アジア・ライフコース・プロジェクト調査からの示唆

以上、韓国キョンサン調査データにそくして、当初に設定した問いに沿って、考えてきた。

最後に、アジア・ライフコース・プロジェクトの予備的インタビュー等から得られた視点を、断片的ではあるが、覚え書として記すことにしたい。

第一に、同一国内の階層的、地域的差異に注目して分析・考察する必要性である。テグにおける予備的インタビューのなかで、高学歴女性がセマウル運動の女性リーダーとして社会的リーダーシップをとり、そのようなリーダーシップを支えるネットワークがあったことを語るケースがあり、高等教育を受けた女性が少数エリートであるからこそ、教育がその後の社会関係形成において、非常に大きな意味をもつことが示唆された。地域的差異も重要である。韓国の場合、特に「女性が家から出てソウル（京城）に行くこと」が人生に与える意味は、注目に値する論点になると考えられる。ソウルでの予備インタビューで出会った女性の中には、若い頃の恋愛（的）経験について語る人がおり、植民地下のソウルでの生活が「女性の家内性」や「貞節の価値」を揺るがし、恋愛などの「近代的な」心性の形成をうながす効果をもっていたことが、示唆された。

第二に、家族形成規範にかんするライフコース調査の枠組みが「直系家族制－夫婦家族制」という前提で設計されてきたことへの反省と、複合家族制の「伝統」をもつ中国や、明確な家族形成規範をもたない東南アジアを視野にいれて、比較考察する視点である。

第三に、「植民地近代」経験を比較考察するという視点である。「日本時代」が人生に与えた影響は、韓国と中国ではどのように異なるのか。16世紀以降19世紀末までのスペイン支配、19世紀末から1940年代までのアメリカ支配という、西欧社会による多重的な植民地経験をもつフィリピンにおいて、「家族・ジェンダーの近代的変容」はいかなる形であらわれたのか。これらの問いを視野にいれて、考察をすすめることが課題である。

第四に、「社会主義近代」がライフコースに与えた影響についての考察である。大連での予備インタビューで筆者らは、少女期まで纏足をしていた女性に出会った。纏足をしていた幼少期から、「社会主義国家の働く女性」へ、国家の強力なリーダーシップのもとでのジェンダー革命を、一人の女性がどのように受けとめ、アイデンティティのなかに統合したのか。

上記のような視点をもって、今後の分析・考察をすすめていきたい。

6. おわりに

本稿では、2004年に実施した、韓国・キョンサン調査のデータをもとに、家族・ジェンダーの「伝統の変化」と「近代」について考えてきた。あわせて、アジア・ライフコース・プロジェクトの経験から、若干の研究視点の提起を行った。

キョンサン調査データ分析から「アジアの家族・ジェンダーの『伝統』と『近代』」を考えるにあたって、提起できる視点は、第一に、家族・ジェンダーの「伝統の変化」と「近代」の様相は多元的だ、ということである。「伝統の変化」「近代的変化」は一元的・一方向的なものではなく、ジェンダー、ライフイベント、国家／階層／民族的位置等によって異なる様相をみせる、多元的・多方向的なものである。

第二に、キョンサン調査データ分析では断片的な記述にとどまったが、アジアの家族・ジェンダーの「伝統」と「近代」にかんする研究をすすめるにあたって、植民地経験を含め、家族・ジェンダーの「伝統」と「近代」をみる視点が重要だということである。その際、「宗主国」と「植民地」との間にある国家／政治的力の非対称性を視野にいれることは重要であるが、同時に、学校、軍隊、医療などの近代的インフラや、消費文化や活字メディアの影響など、両者の間の共通性にも注目して考察することが重要である。

注

- 1) この問題意識はアジア・ライフコース・プロジェクトにおいて、より明確になった。
- 2) 筆者が日韓文化交流基金の助成を受け「訪韓フェロー」として滞在中に実施した調査である。調査の実施にあたって、嶺南大学校生活科学大学（部）の洪上旭さんに、共同研究者になっていただいた。助成研究のテーマは「韓国における高齢者のライフコースと社会変動－家族イベントとのかかわりを中心に－」。
- 3) ここでは調査の概要については簡略に示した。詳細は山根（2006a, 2006b）を参照されたい。
- 4) 研究課題名：「アジア諸地域における高齢者のライフコースと社会変動：家族イベントを中心に」（基盤研究B、2007-2009年度）、研究代表者・山根 真理（愛知教育大学）、研究分担者・上野 加代子（徳島大学）、落合 恵美子（京都大学）、藤田 道代（大手前大学）、長坂 格（広島大学）、中筋 由紀子（愛知教育大学）、宮坂 靖子（奈良大学）、山本 かほり（愛知県立大学）、所属は2009年3月時点）。質問紙調査の実施にあたって、朴京淑氏（韓国・ソウル大学）、洪上旭氏（韓国・嶺南大学）、李東輝氏（中国・大連外国語大学）には、研究協力者として協力いただいた。記して感謝します。
- 5) 現在、データクリーニングと統合の作業中であるので、ケース数は暫定的な数値である。
- 6) 「成人期への移行」をとらえる変数として標準的に用いられるのは、学卒、初職、結婚、離家であるが、このうち「離家」は、結婚後も親と同居してきたケースが多いこの世代の標準的な「成人期への移行」経験として捉えることはできない。

いので、学卒、初職、結婚の三つの出来事について、配列パターンを示した。

7) ケース3と、同一人物である。

文献

- 安藤 由美, 1998『激動の沖縄を生きた人びと—ライフコースのコーホーと分析』早稲田大学人間総合研究センター.
- 安藤 由美, 2000『沖縄におけるライフコースの出生コーホーの比較研究』平成9,10年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書.
- 趙 惠 貞(チョ・ヘジョン), 2002 春木育美訳『韓国社会とジェンダー』法政大学出版局.
- 李 昌 基(イ・チャンギ), 2000 小林和美訳「韓国の『チプ』と『マウル』」北原淳編『日韓村落構造の比較研究』平成9-11年度科学研究費補助金(国際学術研究)研究成果報告書:17-32.
- エルダー, Jr., G., 1986, 本田時雄ほか訳『大恐慌の子どもたち—社会変動と人間発達』明石書店.
- ハレブン, T. K., 2001, 正岡寛司監訳,『家族時間と産業時間』早稲田大学出版部.
- 藤見純子・嶋崎尚子, 2001「ライフコース論的アプローチ」野々山久也・清水浩昭編『家族社会学の分析視角』ミネルヴァ書房:324-343..
- 森岡清美・青井和夫, 1991『現代日本人のライフコース』日本学術振興会.
- 山根 真理, 2006a「韓国における高齢者のライフコースと社会変動」『訪韓学術研究論文集』第6巻, 日韓文化交流基金:82-105.
- 山根 真理, 2006b「韓国の家族・ジェンダーの『伝統』と『近代』再考」北原淳他編著『地域研究の課題と方法—アジア・アフリカ社会研究入門—実証編』文化書房博文社:121-137.

(2010年9月17日受理)